

おとどけ
Pizza Bartz
ピザ パーリ





この物語はフィクションです。

登場する人物・団体・組織などの名称、また事件などは
すべて架空のものです。

実在の人物・団体・組織・事件とは一切の関係がありません。

また、如何なる思想、良心および信仰等を
肯定もしくは否定する趣旨のものでもありません。

加えて、本作品の内容は、暴力等の犯罪行為その他、
あらゆる反社会的・反人道的行為を
肯定および助長するものでもありません。

クロヒス諸房 トオノキョウジ

1. ローリング・バッツ・スペシャル!

「いいから出てきてケツ食い縛しばんな、クソガキあ!」

贈答品のボンレスハムの如きむっちりと逞しい女の左腕が、冷蔵庫の奥から伸びていたスニーカーの脚をむんずと掴み、隠れていた茶髪の若者を引きずり出す。

「な、何すんだよこのピザババア!」

「つるさいクソガキ、ピザはいいけどババア言われるトシじゃねえ!」

怯おびえに裏返った若者の罵倒を、倍にも等しい大音量で言い返し圧倒する大柄な女。暴れる上半身を調理台にばすんと叩きつけ、あっさりその後ろ手に拘束する。せめてもの抵抗なのか、若者の足先が彼女の脚を弱々しく蹴るが、はち切れそうなほど太ましい二本の大黒柱はびくりとも揺るがない。

「店長、仲間のスマホ押さえました」

相変わらず恐ろしいおぼちゃんだと思いつつながら、伝馬一翔でんまいっしょうは彼女に告げる。開店前の店内の電飾看板に手錠でつながれているのは、裏口から逃げようとしていた所を一翔いっしょうが取り押さえた、もう一人の若者。彼が手にしていたスマートホンはロックが外れており、

一翔はすいすいとそれをいじる事が出来た。

「写真とかは？」

赤いシャツのただっ広い背中を向けたまま、女は一翔に訊ねる。スマートフォンを持ち主の若者は看板に背をだらりと預け、いじけた顔で床を見つめている。『ボクサー焼肉炎のジョー』。何とも危なっかしい店名だなと思いつつ、一翔は端末内のファイル保存場所と思しきフォルダに目を通す。

「ああ、まな板の上にそいつ、入蔵駆令二が全裸体育座りでダブルピースしてる写真、これ一枚だけっほいですね。動画もなさそうです」

冷静に答える一翔に、女は釣り気味の目を丸くする。

「なんだい一翔、知り合いかい」

「え、イツシヨーって……おい一翔、てめえ！」

調理台に押し付けられたままの駆令二と呼ばれた若者が、懸命に首を捻って一翔を振り返ろうとする。だがその度に女がぐいと手に力を込め、駆令二はおふうと呻き声を上げる。小さく溜息を吐く一翔。

「店長、前も会ってるはずですよ。その、一緒でしたから、俺」

女は一翔に「そうかい」とだけ答える。丸々とした頬にも確かに刻まれている、年季の皺と声の練り。再びぎんと吊り上がった女の目が、駆令二の背中に的を絞る。

「いいかい、そっちのクソガキも聞きな。お前らのやった事はばつちり威力業務妨害、やろうとした事は立派な偽計業務妨害だ。何だってこんな事するんだい、あ？」

ぐい、と女が力を込め、駆令二くうれいじが痛そうに悲鳴を上げるたび、仲間の若者も、ひいと首をすくめる。

「ちよ、ちよつとウケる写真撮りてーだけだつーの！ まだ何もやってねえじゃねえか、離せうわ痛いたいたいたいたいたい」

「まだって何だい、まだって！ どうせバカな写真をネタにしてネット遊びして、あわよくば小遣いでもタカろうってな魂胆だろ、え？ どうしてそんな懲りないんかね、あんた達は」

凶星を刺されたのかそうでないのか、駆令二くうれいじは口を噤つぶんでしまう。仲間の若者も一翔いっしょうが振り返ると、彼はただ真横にぶんぶんと首を振る。彼の事は、一翔は知らなかった。「ケ、ケイコさんよ。もうそのくらいでいいんじゃないかな……」

店の奥から恐る恐る顔を出したのは、小柄で面長の優しそうな老人。客席の隅からこちらを伺う彼は、少年を拘束する女の剣幕に、まるで自分まで怒られているかのように小さく震えている。そして、

「ああ？ 何言つてんよジョーさん。あんたがもつとシャッキリしないから、こんなクソガキに舐められるんじゃないの。二、三発くらい殴つたれよ！」

實際女に怒鳴りつけられ、ジョーと呼ばれたこの店の店長らしき老人は、もごもご何事か呟いただけで引つ込んでしまった。これでは店の暖簾のれんに冠した元フェザー級ボクサーという経歴にも、何の説得力も感じられない。一翔は手元で苦笑を隠しつつ、「えつ」と前置きして老人に問いかける。

「店長さん、あなたは開店準備中のこのお店に侵入したくわいじ駆令二……：彼が、厨房で撮った写真を使ってあなたを脅してきたので、当店のサービスを『注文』オーダーした。間違いありませんか？」

店長ジョー氏は一翔の問いにこくこくと頷く。うなず額を汗で濡らしたくわいじ駆令二がぎろりと睨みつけてくるが、一翔は気付かないフリをして話を続ける。

「犯人の持ち物を確認したところ、写真が流出した形跡はとりあえず無いようです。住居侵入や器物損壊の現行犯で警察へ引き渡す事もできますが、どうしますか？」

没収したスマートホンをもそのまま胸ポケットにしまい、代わりに小さなメモ帳を取り出す一翔。写真回収済み、流出ナシ、通報ナシ。この勤めを始めておよそ三ヶ月、こうしてボールペンを走らせる自分の姿も中々サマになつてきたんじゃないかと、一翔はこつそりと思う。

ごく僅か考える素振りを見せた後、ジョー氏はいいやいやと首を横に振り答える。

「しゃ、写真だけしつかり消してくれてさ。もうウチでもよそでも同じ事をしないよう

に誓つてくれりやあ、ウチはそれでいいよ。まだ若いんだ、出来心つてやつじやあないのかい」

「そ、そうだよ！ あん時と同じ出来心だよ、なあ一翔！」

老人が見せた情けをまるでチャンスと思つたかのように、駆令二ははつと顔を綻ばせて同意を求める。あの時と同じ。一翔がその言葉に躊躇う間も無く、女が呆れの溜息を深く深く吐く。そして、大量の酸素をひゅうと吸い込み、

「出来心じゃねえ犯罪なんざありやせんわ、アホ言うな！」

一喝を叩き付けると同時に、大きな右手の、巨大で長大な棒状の得物を高々と振り上げる。

「さあ、もう一度だけ言うぞ、クソガキ。明日の朝も快便したきや、黙つてケツ食い縛んな！」

「ふざけんなババア！ 何すん」

言いかけた駆令二は、ケイコの振り上げたそれを視界の端に捉えた瞬間、言葉を失い息を呑んだ。麵棒だ。両端に小洒落た握りの付いた、ピザ生地などを伸ばす白木製の調理器具。だが彼女の手にしていたそれは、彼女の腕よりも少し長く、彼女の握り拳よりも遙かに太い。

赤いポロシャツの縫製を引き千切らんばかりに、むきりと太くなるケイコの豪腕。

一翔がたまらず目を背けた、次の瞬間。

「ふんぬッ！」

ビュおつ、バちいイっ！

空気を強断した白木の大樹が、駆令二の尻を強かに打ち据えた。店じゅうの壁に貼られたカレンダーや品書きが風圧でひらりとしなり、黄ばんだサイン色紙が畳に落ちる。

「あオ……っ！」

坐骨から全身へ走る激痛と衝撃に、駆令二はまともな悲鳴すら上げられない。だがケイコは微塵の容赦も見せる事無く、再び麵棒を振り上げる。

「おらクソガキ、何か言う事あるだろ、あ？」

「っ知らーねえよピザババア！ イ、一翔何とかしろよこれ、ショーガイサイじゃねえのかよ！」

駆令二の助けを求める声を聞き流しつつ、今度は自分のスマートホンを取り出す一翔。画面上部のステータスエリアに書かれた「圏外」を見て、おっと、と一翔は呟く。店の外に停めてある赤と黒のスリーターに戻り、スピードメーターの横に備え付けられた、「J A M M I N G」の文字が赤く光るボタンを押す。きゆうん、と電磁的な音響を残し

て、赤い光は消える。

「あ、お疲れ様です、伝馬です。ええ、無事にご注文お伺い、済みました……はい、『マジュトリー』の身元も確保、再犯時は正式に通報することで登録お願いしていいですか。ええ、今回はナシですわね」

店内に戻りながら、自分のスマートフォンとペアリングしたブルートゥースインカムのスイッチを入れる。ジヨウ氏に対するそれよりやや砕けた口調で、電話の相手に淀み無く報告を進める一翔。駆令二とその仲間の様子も、油断無く観察しながらだ。逃げ出す様子も方法も無さそうだったが、ヤケになって暴れ始める事も考慮し、警戒する。

びゅあつ、バつううツ！ ケイコの振り下ろした第二撃が、駆令二の尻を痛々しく鳴らす。脱げかけたジーパンの下で彼の尻が腫れ上がっていく様子を、一翔は容易に想像できた。老人や仲間の若者も、そのおぞましい衝撃に鳥肌を立てる。

「ええ、いつものお仕置き中です。これが済んだら、保護者に連絡して帰宅させますんで。はい、じゃあお疲れ様です」

つつがなく業務連絡を終え、電話を切った一翔は、哀れみの眼差しで見守る老人に三つ折りのチラシを一枚手渡す。そこには『P i z z a B a t t z』の、赤と黄色の派手なロゴ。加えて、キリトリ線に囲まれた五百円引きクーポンの並ぶ紙面に、「防犯ご注文も当店へ！」と大きく記載されていた。

「じゃあ、ジョーさん。これが済みましたらすぐにこの二人、こちらで引き取りますので。もしまた何かありましたら、次回もどうぞご連絡下さい」

「ざっけんなよ……この、ピザ……ふざけんなよ……！」

拗ねた子供のような口惜しげな涙声で、ケイコを罵倒する言葉だけをぶつぶつと漏らし続ける駆令二。ケイコは改めて呆れ返る。腕を後ろに極められ調理台にぐったりと伏せたままの駆令二だったが、ただひと言の謝罪も頑として口にしようとしなかった。

「つたく、無駄な根性見せるねこのガキは。誰かさん時は、もつと手つ取り早かつたんだけどねえ」

ケイコは一翔をちらりと見やり、三度得物を振り上げた。

ピザバツ刈田場町店長、音戸ケイコ。齒に衣着せぬ物言いと頼もしさ、そして目撃者の間で語り継がれる巨大なおしおき麵棒で、町中に名を馳せるデリバー・ガード。言葉も振舞いも荒っぽい、彼女が決してただ感情のままにあんな強烈なおしおきをしているのでは無いと、一翔は知っているつもりだった。駆令二達のような『クソガキ』を叱りつける彼女の表情はいつも真剣で、人様に迷惑をかけた子供が己の行いを恥じて悔い、立ち直る事を望んで待っているのだ。

叩き込まれなきやわからない事だつて、この世間には結構ある。一翔は己の身を以つてそれを知っているつもりだった。何故なら彼もかつては彼女に尻を叩かれた、いわゆ

る『クソガキ』の一人だったからだ。

「カンケーねえだろ、ピザ屋なんか……ンなちよつと写真貼られたくらいで潰れるよ
うな店なんかよ、最初から無えほうがマシじゃねえか……」

だが駆令二の口からは、未だに謝罪の言葉が為される様子は無かった。その強情さに
ケイコと一翔は啞然とし、互いに顔を見合わせる。

「おい、クソガキ。知らないのか？ お前は悪いことをしたんだよ、ごめんなさいって
言う立場なんだよ！」

「知らねえよ！ まだアップもしてねえし……全然大丈夫じゃねえかよ、いいから離せ
よ。ピザババア！」

何度も繰り返されてきたケイコと駆令二の言い合いに、一翔がそろそろ潮時かと思い
始めた頃、そこへ。

「れ、令ちゃん！」

一人の細身の女性が、店の裏口に現れた。神経質そうな細面に、ウェーブのかかった
茶髪をふわふわさせ、一翔や床の若者を押し退けながらずかずかと入り込む。一翔は
彼女に見覚えがあり、すぐに思い出した。そうだ、駆令二の母親だ。

「あ、あなた！ うちの令ちゃんに何してるんですか！ 乱暴はやめて下さいよ！」
駆令二の拘束を解こうと母親は手を伸ばすも、ケイコのひとつ睨みで慌てて引つ込める。

「なんだ、母親か……おい一翔、さっきの写真貸せ。それからこのガキちよつと固めとけ」

奥底に怒りの煮え滾るドスの利いた声で、ケイコは一翔に指示する。一翔は黙って駆令二の左手首を彼女から受け取り、出張った骨の部分を素早く掴む。かつて彼女に教わった、力を込めずとも動かさなくする方法だ。

肩越しに睨む駆令二の視線が未だに気になりはするが、それでも一翔は彼と目を合わす事はしない。

「ちよ、ちよつと令ちゃん離してくださいよ！」

ヒステリックに声を立てる駆令二の母親に向かつて、ケイコは麵棒を手に提げたまま口を開く。

「あのな、お宅の息子さん、この店のまな板にナマ尻で座って写真撮って、ネットに上げようとしてたんだよ。今のご時勢こんなのがバラまかれちゃ、何がどうなるかお母さんならわかるだろ？」

怒鳴りつけたい感情を抑えに抑えてなのだろう、ケイコは可能な限り簡潔に、そう説明した。駆令二は一翔と同じ十七歳で、高校二年生。今まで一翔が見てきたケースで言えば、親がしっかりと頭を下げて責任を取る覚悟を見せれば、ケイコは納得する筈だった。だが。

「写真広がつちやっただですか？ まだならいいじゃないですか！ それにネットに出したからって、お店に迷惑になるなんて限らないじゃないの！ 令ちゃん、何も悪い事してないでしょう！ 離しなさいよ、令ちゃんが可愛そうだと思わないの？」

「あろう事か、母親は何の悪びれもせず、ケイコに向かって勢い良くまくし立てたのだ。一翔はケイコと再び目を見合す。ああ、これはダメだ。」

「わかんないかい、ああそうかい……こんの『マジュトリー』どもが！」

保護者の登場で窄み始めたかに見えたケイコの怒りが、逆に一気に膨れ上がり、怒号となつて飛び出した。

徐に、ケイコは自分の胸ポケットからスマートフォンをよいしょと引き抜く。そして拘束された駆令二の姿や、血走った目の母親の表情を手早くばしゃばしゃと撮影し、母親を睨みつけて言い放つ。

「じゃあ親父さんの勤め先と、このガキの学校に、誰がナニをしようとしてどうなったかメールで送つといてやるよ。警察沙汰寸前の騒ぎを平気で繰り返す息子さんなんかない、親父さんは今のまま仕事が出来ると思うかい、ええ？」

「……つざけんな！ きよ、脅迫じゃねーかよそれ！」

ケイコの意図にはつと気付いた駆令二が、再び拘束を解こうと暴れ出す。一翔が手の捻りを強くし、三度押さえ込まれた駆令二を見下しながら、

「へえ、わかつてんじやねーか、あ？ お前らはな、コレと同じ事をしようとしてたんだよ！」

ケイコは麵棒めんぼうの柄を立てて、駆令二くれいじーの頭にぐりぐりと押し付ける。そして。

「お前のやった事は、母親に恥をかかす事！ 母親の足らねえ躰しつぱは、旦那に恥をかかす事！ 常識知らねえ一家の扶養かようは、会社に恥をかかす事！ お前らの頭のネジが足らねえお陰で、色んな人が酷い目に……」

遭あうんだよ！ ケイコは怒りの昂ぶるまま、駆令二くれいじーの母親に掴み掛る。年の頃はケイコと同じくらい、だがケイコの半分の太さも無いその細腕を、ケイコは躊躇ためらいひとつ無く捻り上げ、調理台の上、駆令二くれいじーの隣にばしんと上半身を押し付けた。

「や、やめなさいよ！ 離はなしなさいよ！ ケーサツ、誰かケーサツう！」

振り上げられる巨大麵棒めんぼう。駆令二くれいじーの母親の、歳相応とせとは言い難いフリルの白いワンピースが、じたばたと必死に暴れる。

「で、自分達はそういう目に遭あいたくなくて？ 他所よそはどうにでもなれ？ ざけんなクソガキ共あ！」

びゅごうつ、バヂイっつ！

目を覆おほった一翔いっしょうの両手の向こうで、この日最も強烈な衝撃と音が、駆令二くれいじーの母親の尻しつぽを叩たたいた。

2. ミラクル・ミーツ！

「ハンバーグなう」

かつてただそのひと言と共にツイッターにアップロードされた一枚の写真は、飲食業界を震撼させた。

写っていたのはとある工場内の、業務用食品生産ラインと思しき精肉おぼが運ばれていくベルトライン。アルバイトらしき若者が、あろう事か下半身裸でそこに跨り、野外で用を足すかのような姿勢を取ったその姿を、スマートフォンで撮影したものだ。

写真は悪意混じりの非難の声と共に瞬く間に拡散され、すぐさま撮影場所を特定された。大手ファミリールェストランチェーン『ガッツト』その調理済みハンバーグ生産工場。元契約社員を名乗る何者かが、写真の背景にあった食材や設備から確信を得たと、その写真つきツイートに便乗する形で具名名を出したのだ。

『ガッツト』は主力商品となるハンバーグを前面に押し出したラインナップと、昭和の頃から変わらない抑え目の価格設定で好評を博していた。有名性が仇あだを為し、マスメディアがこの騒ぎに飛びついた。行方知れずの撮影者ではなく、『ガッツト』を運営する企

業『ガッツトフーズサービス』そのものに、虚実入り混じった糾弾きゆうたんの声が降り注いだ。『ガッツトフーズサービス』は、撮影場所と疑われる工場を即時閉鎖。残る他の工場でも徹底した消毒を行い、その計画書と消毒会社との取引内容までを、自社ウェブサイトで公開した。だが風評はその伝播でんぱの速度を落とすこと無く、ほんの数日前まで順調だった客足の伸びを冷酷に断ち切った。

『ハンバーグなう事件』と揶揄やゆされ、オンライン、オフラインを問わず飛び交ったこの話題の焦点は、『ガッツトフーズサービス』の管理体制の甘さと就労体制の厳しさ、果ては現代の食品衛生管理の是非を問う非難の声に隠れて、次第にぼやけていった。

事件の根源となったそもそものツイートの一体何者による物であったかも、結局誰にも突き止められぬまま一ヶ月が経った。世間が少しづつ「ハンバーグなう」と悪ふざけで呟く事にも飽き始めた頃、多額の借入金かいかい金を投じ事業を拡大していた最中だった『ガッツトフーズサービス』は、再建努力の甲斐無く全店舗を閉じて破産手続を開始、飲食業界からひっそりと姿を消した。

くれないじー
駆令二と母親、そして彼の仲間も、やはりケイコの麵棒めんぼうを存分にその尻しりに浴びせられた後、ぐったりとした表情で解放された。

ごめんなさい、ごめんなさい！ ケイコがさあ三発目と麵棒めんぼうを振り上げた所で、母親

はあつさりそう口走った。ご迷惑かけました、許して下さい、すみませんでした。

涙を流しながら矢継ぎ早に口から放たれるそれらの言葉に、まるで反省の色が見えないと思っただけは、もちろん一翔だけではなかった。まるでこちらの暴力に屈して、痛みから逃れる為だけに仕方なく頭を下げている。

今ひとつ釈然としない顔をしながらも、ケイコは三回目の麵棒を振り下ろす事無く、母親を拘束していた左手を離した。

案の定母親は、自由になつた身で真つ先に一翔につかみかかった。化粧のぐずぐずになつた鬼の形相に思わず一翔は怯み、駆令二はその隙にすかさず身を捻って抜け出した。「令ちゃんの分も謝つたんだから！ もうこれでいいでしょう？」

一翔とケイコは、今日何度目かわからない脱力形のアイコンタクトを交わす。だめだこりや。一翔は自分のメモに素早く目を通し直す。氏名、スマートホンのキャリアと型番、電話番号。それから二人のツイッターID。画像は削除済み。今後起きかねない万が一に備える為に、必要な情報は一通り取る事が出来ただろう。

口を真一文字に結んだまま衣服をそそくさと整える駆令二とその母親に向かつて、一翔は努めて事務的に伝える。

「じゃあ今日はこれで。今後こちらのお店に何かありましたら、お宅の事を真つ先に警察へ届けますので」

「ご了承下さい。一翔いっしょうのその言葉を最後まで聞く事無く、親子は逃げるように焼肉店から去って行った。

社会から、モラルは消えつつあった。

ゆとり世代と呼ばれた年代の若者達が子を為し、またその年代の大人や教師達が子供を育てた。社会道徳や、『やってはいけない』事は何故やってはいけないのか」を伝えられる者は減ってゆき、子供達はその場の愉快さだけを追い求め、迷惑行為をそれと知らず行う事が普通であると思いつながら育った。

ゆとり世代の親たちがリタイアをする頃には、少しずつ増えていた次世代ゆとり世代の若者達が国中に溢れていた。無知と無恥の連鎖が、かつては常識の筈だった「人様に迷惑をかけない」通念そのものを、マイノリティに変えつつあった。彼らを表す、あるいは彼ら自身が自らを揶揄するスラング『マジュトリー』が生まれ、定着した。

『ハンバーグなう事件』による『ガッツトフードサービス』の倒産後も、ネットワークインフラを悪用した悪ふざけや嫌がらせは、燃え広がる山火事の如く次々と発生した。それらのほぼ全てがアルバイト、またその近辺に増えていたマジュトリー達による『ハンバーグなう事件』の模倣犯罪だった。他者を貶める下卑た享樂は、マジュトリー達にとって格好の玩具だったのだ。

彼らの他愛も無いイタズラをきつかけとした、炎上や風評被害、また始めからそれを仄めかす脅迫ききうはくまがの行為。全国の飲食店で横行し始めたそれらをネットニュースなどでは『バイトテロ』と呼ばれ、ネットユーザーはその非常識を責めた。親は何してる。責任を取らせる。これだからゆとり世代は。追求と非難の言葉ばかりが、祭の後のネットワークに虚しく飛び交った。

マジュトリー達はその反応を、ただ楽しんでいた。常識人達が騒ぎ立てるその様子が、結果として次の事件の発生を煽あおる一因にしかなくなっていなかった。店や企業が、いつ自分達がイタズラの標的にされるかと脅える様子も、どこかの店が潰れたという噂も。果てはその原因となった若者が特定され、多額の損害賠償に人生を失ったとしても、マジュトリー達は笑った。あいつはしくじっただけ、へボかっただけ、と。

十月半ば、土曜の午後五時。通りを挟んで向こう側の刈田場町かいたばちよう駅から、帰り道らしき人々がぼつぼつと零こぼれてくる。スーツの男三人組が、武装したままのケイコや一翔いっしょう達を怪訝な顔でちら見しながら、『炎のジョー』の暖簾のれんを潜くぐって店に入っていく。先ほどの狼狽うろたえっぷりはどこへやら、ジョー氏の元気な「いらっしやい！」が響いてくる。どうやら落ち着いてくれたようだ、一翔いっしょうは安心する。

「今考えると、あんたはだいぶあつさり大人しくなったねえ、一翔いっしょう」

にやにや混じりのケイコの冷やかしを、一翔いっしょうは「ほつといてください」と短く受け流す。さつきまで尻を叩かれていた駆令二くわいじの姿にかつての自分が重なって、あの麵棒めんぼうの衝撃と音がフラッシュバックする。

「刈田場カッゴ高校コウまわりをチラシ撒きついでに回って、テキトーにお勤めしてから店戻るつす。六時くらいにいりゃあいすか？」

腕時計を見つつ巡回ルートを頭の中で組み立てながら、一翔いっしょうはケイコに訊ねる。駆令二くわいじ達がいなくなり、普段の口調に戻った一翔いっしょうに、ケイコはあいよ、と頷うなずく。

「夜はぼちぼち冷えてきたし、町のバカも減へつてくれりゃいいんだけど。玉たまは？」

「十発詰めて来て使つかってないんで、大丈夫だいじゆうつすね。んじゃ」

とりあえずお疲れおつかれた。かぶったままだったヘルメットの紐を直し、スリーターのキーを回す。傷だらけのキャノピーがぶるんと揺れてエンジンが目覚める。小さく手を振るケイコをミラーで見てから、増えてきた人の行き来に目と気を配る一翔いっしょう。『P i z z a B a t z』のロゴを躍らせて、赤と黒のスリーターはバス通りの車達の隙間にスムーズに紛れ込む。

思い出すたびに全身をぞわぞわさせるその恥ちずかしさ。そして、今日の駆令二くわいじの憎にくましげな視線。信号待ちの間にあらゆる物が脳の中を走り、わあわあ一人ひとり呟つぶいて頭を振る。そして不思議に思う。絶対こんな後悔に責め立てられる筈はずなのに、駆令二くわいじも自分も、

どうしてあんな事をしたのだろう。しかも、くわいじり 駆令二は未だに懲りず、あんな事を続けようと思えるのだろうか。

今でこそこうして、新人とは言えデリバー・ガードの一人として、同年代の人間を偉そうにしびき倒す立場でいる一翔だ。だがほんの三ヶ月前までは一翔自身も、世間にとつてははた迷惑な、マジュトリーの一人でしかなかったのだ。

マジュトリー達がはびこる現況の中、国内全ての飲食事業者にとって『ガッツト』の悲劇はもはや他人事では無かった。経営者達は揃って戦々恐々とし、直ちに各省庁や地方行政と連携、対策に取り組む事となった。店舗勤務者による自衛力及び自浄力の強化と、地域の治安維持力の向上。それらの早急な実現を目標に、食品の宅配販売を主事業とする国内大手チェーン三社は共同で、日本経団連にほんけいだんれんに対し、ある計画を提唱した。

警備兼業配達員けいびけんぎょうはいたういん、通称『デリバー・ガード』の設立である。

『デリバー・ガード』とは、第一号から第三号までのいずれかの警備業務認定を取得した飲食事業者による、市外警ら及び軽犯罪の抑止と防止を目的とした職務、また職員の仕事である。事業者が主とする飲食宅配事業の傍ら、配達業務の為の機動力を活かし、認可を受けた店舗から規定範囲内の警ら活動を行う事で、地域治安に貢献する。

日本経団連はこの計画を採用し、警察庁もこれを支持した。「主たる業務が疎かにな

らない程度」での、「警察組織、また既存の警備事業者の活動の妨げにならない程度」での、軽犯罪防止活動。モラルの低下による軽犯罪の増加率に対して警察組織の人員増強が追いつかない現状にあつて、民間が一丸となつて自衛力を増強しようとする申し出を、歓迎しない理由が無かつた。

『ガッツト』の倒産から一年後、そして今からおよそ一年前を数える、二〇一四年の元日。内閣府特別機関『マジトリー総合対策会議』が設置され、大手デリバリーチェーンは元より、治安維持活動に積極的な姿勢を見せる中小企業への助成金として、潤沢な予算が割り振られる。

デリバー・ガードとマジトリー達による、モラルと治安の低下を水際で食い止める戦いは、こうしてその火蓋を切つた。一翔がケイコと出会つたのは、この戦いが始まつてから彼らが迎える、最初の夏の事だつた。

俺たちも金欲しくねえ？ と誘うくれいじー 駆令二の言葉に、一翔も「じゃあやっちゃうか」と乗つた。私立飯馬いいは高等学校、二年C組のクラスメイトだつたくれいじー 駆令二の事を、一翔は特別仲の良い間柄だとも感じてはいなかつた。ただ、少しまとまつた金が欲しいとちようど思つていた所への誘惑に、ついふらりと傾いてしまつたのだ。

朝の三時にコンビニで待ち合わせたくれいじー 駆令二と共に、彼の原付に二人乗りをして、狙い

の店へ向かう。バス通り沿いに出来たばかりの小さなパン屋が、彼らの標的だった。大人しそうな未亡人がパート何人かの手を借りて営む、石窯焼きの手作りパンの店だ。

仕込みの最中なのか開けっぱなしの裏口を見て、一翔と駆令二は頷きあう。数メートル離れた曲がり角にスクーターを止め、忍び足で近づく。店主の女性が材料を取りに場を外した隙に、奥の厨房に忍び込む。

厨房を手早く物色する。調理台に寝かせてあった生地を見つけた駆令二が、それに顔を躊躇無くまっすぐに突っ込んだ。一翔がすかさずスマートホンで撮影する。

「一翔、一翔！ お前ちよつと脱いで、これ着けてみ？」

駆令二はやたら嬉しそうに「ヌーブラヌーブラ」などとつぶやきながら、メロンパンだろうか、ほぼ真円に整えられたパン生地を二つ胸元に当てる。あ、バカだこいつ。一翔は苦笑いしながらも、少し汗ばんだTシャツの袖から腕を抜く。

「あ、あの……！ 何ですかあなた達……ッ！」

エプロン姿にレタスがつまったボウルを抱え、黒髪を三角巾で束ねた店主が、震える声を彼らにかける。髪を逆立てた見知らぬ男二人の闖入に、彼女は明らかに脅えている。ちよつど撮れたばかりの画像が映ったスマートホンを、一翔は黙って彼女に突き付ける。そして、うつすらと白くなった顔の駆令二が顔を手の甲で拭いながら、

「あのさあ、今ちよつとこんな写真撮れちゃったんすけど。こんな汚い生地使ってるな

んで噂広まっちゃつたら、たぶん炎上しちゃって、パン屋さん大変っスよね？」

店主は駆令二の意図をすぐに察し、ボウルを傍らの棚に置いて詰め寄る。スマートホ
ンに伸びた店主の手をすつとかわす一翔と、間に割り込み小馬鹿にしたように笑う
駆令二。

「ちよ、ちよつとやめてくださいよ！ 何でこんな事するんですか？」

「いやあ、何て事無いっス。俺らちよつとばかり貧乏なんで、援助してもらえないかな
あつて、そんだけつすから、ね？」 『ハンバーグなう』みたいになりたくないっしょ？」

物怖じを見せない駆令二の様子に、小さく震える店主の女性。不安げに胸を押さえて
目を泳がせ、そして消え入るような声で「わかりました」と口惜しそうに溢す。勝ちを
確信した笑みが、駆令二の横顔に浮かぶ。うまくいくもんなんだなと、一翔はほつとし
たような感覚に襲われる。だが。

一翔の耳に届いたのは、静まり返った夜を裂く、バイクの甲高いモーター音。それは
やけに遠くから異様に速く接近し、すぐそこで止まった。駆令二も数秒遅れて気付く。
彼ら二人が目を見合わせたその瞬間、裏口を塞ぐ大きな影。

「おら！ そこまでだよ、クソガキども！」

みちみちの赤いポロシャツに包まれた、丸々としたボディ。黒いバイザーヘルメット
の奥に走る、貫くような眼光。太い棒状の得物。只者でない事、そして明らかに味方

はない事だけは二人には判った。赤鬼。一翔の脳裏にそんな言葉が閃いて消える。

「な、何だてめえ、このピザ！」

口では威嚇しながらも、駆令二の腰は引けている。視線は落ち着き無く駆令二やパン屋の店主、そして現れた赤鬼を行ったり来たりし、足はじりじりと後ろへ退いている。

「に、逃げる駆令二！ 表の方行け、早く！」

一翔は無意識に駆令二をかばうように立ち、手元に転がっていた棒切れをたぐり寄せて掴む。奇しくもその形状が、目の前の赤鬼が持っているそれと酷似している事に気付く。

「おいこら、逃げんなこのガキ！」

太い棒を肘の高さに上げて構え、ずんずんと踏み込んで来る赤鬼。ひい、と小さく悲鳴を上げた駆令二の太腿あたりを、赤鬼の棒が狙って穿つ。かあん！ と響く白木同士の衝突音。咄嗟に伸ばした一翔の得物が、赤鬼の初撃を辛うじて弾いた。わずか一瞬驚愕した鬼の眼が、ぎろりと一翔を捉える。

「いいから行けって、駆令二！」

礼も謝罪も残す事無く、駆令二は厨房から飛び出す。店と表通りをつなぐ正面玄関で、ガラス戸の鍵を内側からがちがちと外す。店主が彼を追うかと思いい翔は横目で彼女を見るが、その様子は無い。

「へえ、逃がしてやったつもりかい？」

赤鬼のその問いが誰への物か、一翔は少しの間察し兼ねた。店主が応える様子は無く、一翔は無言で一度頷いた。スクーターの音が遠く消えて行く。さて、どうしたものか。

「こ、この人がへんな写真撮ってました！ 仕込み中のパンにイタズラしてるとこ、撮ってたんです！」

店主が一翔を指差して、必死に声を張り赤鬼に教える。

「やれやれ、また『ハンバーグ』狙いかい。どいつもこいつも考える事は一緒だね、つたく！」

「……何なんすか、アンタ。ご近所さんか何かつすか」

棒状のそれ、極太長大な麵棒で左手のひらをぺしぺしと打ちながら、顔をしかめる赤鬼。

「見てわかんないかい、ピザ屋だよ。緊急の『ご注文』に駆けつけたってわけさ。いいからスマホ出しな、どうせ写真はそん中だろ？」

ピザ屋。言われて初めてこの赤鬼の格好が、確かにそんな風に見えなくも無い事に一翔は気付く。だがしかし、何故ピザ屋がこんな時間に、こんなタイミングで、今にも自分をぶん殴らんと身構えているのだろうか。この時はまだ、彼はその赤鬼の勤めを知らなかった。

一翔は麵棒を左手に持ち替え、尻ポケットに入れていたスマートホンを右手で取り出してそのまま操作する。そしてつい先ほど撮った駆令二の写真を画面に映して、ピザ屋の赤鬼に見せる。

「何か、俺のこと捕まえるみたいな雰囲気出してるとすけど、とりあえずここから逃がしてくんないと、コレ、ツイートしちゃうかもしんないっすよ」

出来る限り冷静を装い、対等な状況を演出しようと努力した一翔だったが、赤鬼にはあつさり一笑に付された。やれるんならやってみ？ 丸い顎をくいと動かして挑発する赤鬼。

どうにでもなれ、と心中で呟き、一翔はツイートボタンに親指をかける。円形の送信中シンボルがしばらく回った後、表示されたのは「送信エラー」の冷たいひと言。画面上端にしっかりと書かれているのは「圏外」のステータス。

こんな所で、圏外？ 動揺にびたりと固まった一翔の手を、赤鬼の大きな平手がざちんと弾く。こう、と一翔の頬を打つ風圧。壁に吹き飛んだスマホに気取られたその隙に、赤鬼の巨軀は淀みなく動く。スマホを失った右手を掴んでぐいと引き、駆令二の顔型のパン生地が寝転んだままの調理台に、ばんと引き倒される。バランスを崩し宙を泳いだ左手を赤鬼が捕らえ、後ろ手に捻り上げてホールドする。

「うおふっ！」

台の角で腹を圧迫され、呼気が一翔の口から洩れる。刑事モノでこういうの見た事あるけどさ！ あまりの鮮やかさに一翔はそんな事を思ったが、直後左上半身のあらゆる関節を襲った痛みに、あつさりとそれは掻き消えた。

「ホントにアツプしようとしやがったよ。何も考えてないんかね、このガキは！」
本気で呆れる赤鬼の声。同時に、背後の空気が嫌な雰囲気で動くのを一翔は感じる。
「さあ、ケツ食い縛んな！」

暗い照明の下、調理台に落ちてくる長い影。まさか。

びゅおつ、ばちいっ！

「んおつ……ツ！」

鋭い痛みが一翔の尻肉を叩く。坐骨から全身の骨に走る衝撃波と、遅れて続く鈍痛と熱。たまらず悲鳴を吐く一翔。

「おら！ 何でこんな事したんだ、答えろガキ！」

そして背中を叩く赤鬼の怒号。痛みと恐怖、そしてこんな有り様の自分へのあらゆる感情が、動悸となつて一翔の意識をぐらぐらと揺らす。何でこんな事したんだっけ、駆令二に誘われたからだっけ。呻き声ばかりの一翔を、赤鬼はさらに問い詰める。

「アップするぞーなんてアタシの事脅おどしてきたってこたあ、何がどうなるって大体わかってんだろ？ 何でそんなことすんだ、言ってみろ、おら！」

「ぼ、バイクつす！」

今にも振り下ろされそうだった二発目の麵棒めんぼうが、一翔いっしょうの漏もらした一言にぴたりと止まった。

「バイク欲しかったんすよ、バイク！ 中古の、五万くらいの一！」

零れてしまった本音を、一翔いっしょうはそのまま白状する事にした。意固いこ地ちになつて何とかなるような状況でない事は、言葉通り痛いほど理解していた。

「俺おれんち、金無いのに……金かかる私立のバカ高校しか受かんなくて……！ 痛いたえつて、痛いたえつすつて！」

「だったら働はたらきやいいじゃねえか、何でこんな事すんだよ！」

「一回ちよつとバイトしたんすつて！ んでも、親父が！ バイトなんかしてねえで真面目まじめに勉強べんきやうしろつーから！ だから金無なくつて、んで駆令くわいじやうニが、今流行はやつてるからちよつと『ハンバーグ』やってみようぜつて……ギブギブ、曲まががんない、それ以上ムリつすつて！」

かつての事件を擲なげする『ハンバーグ』という言葉に反応したのか、左手ひだりての捻ねじりがさらかにきつくなる。赤鬼あかおには傍かたわらで様子を見守っていた店主たぬしに訊きねる。

「奥さん、このお店の開業資金、いくらくらいになりました？」

不意に話を振られうろたえる店主が、一翔の視界の端に見える。

「え、そ、そうですね……亡くなった主人と三年くらい、少しずつ貯めたお金を使って

……五百万円は」

「おら、バイク百台分だつてよ。お前、五百万円の店潰して五万円のバイク買うつもりだつたの？」

ふざけんじゃねえよ！ 一喝する赤鬼に、

「つ、潰れるかどうかなんて、わかんないじゃないすか！」

一翔もぼそぼそと言いつ返すが、結局は火に油を注ぐ事にしかならない、そんな気がしていて、その通りになった。

「そういう事になり兼ねないと思つてつから脅迫したんだろ、お前は！ こんな顔型ついたパン売つてるなんて噂が立つちやあ、そりやあ商売できねえよな？ 保健所も来るよな？ パン売れなくなるよな、材料買った分とか元取れねえよな？ ご主人と一生懸命がんばつた三年間でのモアだよな？」

深夜にも関わらず声を抑える事もせず、赤鬼の口調はますます荒ぶる。小麦粉の袋の山の上に落ちていた一翔のスマートホンを、赤鬼は手を伸ばして拾い上げ、一翔の顔の間に突き付ける。本体にも画面にも目立った傷は無く、一翔はほんの僅か安堵する。



「お前このスマホどうしたんだよ？ 自分ち金無いって自分で言ってるのに、買ってもらった大事なスマホでこんな事やりやがって。いくらしたんだ？ お前が親父さんがど
んだけ働いていくら稼いで、お前の世話をしてやってると思ってるんだよ！ あ？」

一翔の背中に浴びせかけられる赤鬼のその説教は、若干論点がズレて来ているような気がした。ちよつと違うんじゃないかと言いたげな顔の店主と、一翔の目が合った。赤鬼自身も気付き、それを誤魔化ごまかそうとしてか一層声を荒らげる。そして、

「つつかそもそも金の問題じゃねえんだよ、もつかいケツ食い縛れガキあ！」

ここまで何が幾らだと言いつつおいて、さすがにそれは理不尽だと思いつつも、
「すんませんした！ ホントごめんなさい、ほんとすんませんしたア！」

一翔は次の一撃が振り下ろされるまでの数秒間、ただひたすら本気で謝り続けた。

おとどけ！ピザバツ

発行日 平成二十五年十二月三十一日 初版

発行者 トオノキョウジ（クロヒス諸房）

連絡先 kyozy.tohno@gmail.com

WEB <http://ameblo.jp/kyozy-tohno/>

印刷所 株式会社ポプルス